

三浦祐之著<口語訳：古事記>

◎オホサザキの話に入っていく。

◎何度か書いたが、オレの子ども時代、父が働く会社の社宅の家族の方々と、バスで何度か海水浴に連れて行ってもらった。羽衣や、二色が浜あたりの、砂浜があり海の家が並んだきれいな海だった。当時の記憶はおぼろげながら、多分、おんぼろボンネットバスに揺られ、家族四人や近所の方々と乗っていた。バスガイドかどなたかがマイクで、「あれが仁徳天皇陵です 大きいでしょう 世界一です」と説明を受けた。60歳ぐらいまで、仁徳天皇陵と信じていた。自転車で行ける近隣の今城塚古墳が発掘され、「大王の杜」と命名された公園ができた。その少し手前に、継体天皇陵という古墳があり、いつも宮内庁の門番が常駐している。学者連は、今城塚古墳が本当の継体天皇陵であるというが、なぜ、大王：だいおうというのか、継体天皇陵と言わないのか、不思議に思っていた。60年間のオレの中の天皇に対する常識が崩れ始め、先生が言うように、古事記の時代の王は、神話でありお話であり、ほとんどが実在や実話と思っではいけないとわかってきた、自分の常識が崩れてきた。多分オレ世代の人達は、この10年20年で、「あれは嘘だったのか・・・」とぽか～んとする人、「いやいや 天皇家は大事だ」とふんばる人と様々だと思うが、この話はあまり話題に出ない、意見交換もない、まして酒の席では出てこないという不思議な日本の人々である。

◎オホサザキは、難波の高津の宮に座（いま）して天の下を治めたもうた。第十六代仁徳天皇のこと。

◎5世紀前半に実在したと考えられる。中国の南北朝時代の宋書に、倭の国の使者が朝貢しており、その倭の国の王の名として讚・珍・濟・興・武の5人の名が見える。どの天皇を指すか様々な見解があるが、武がオホサザキだという説が有力である。

◎古事記の内容は、オホサザキが武であり、実在したとしても、語られる出来事が事実を語っているわけでもなく、お話としてみるべきであろう。オホサザキという大王がいて、難波に勢力を築いていたのは事実であろう。仁徳天皇陵と言われた古墳は、現在は、大仙古墳と呼ばれている。発掘調査が待たれる。

◎その大王が奈良盆地の葛城氏と組んで、ヤマトに勢力を拡大していったと想定される。

◎五世紀前半に天皇家が最初に出現する萌芽であり、国家の成立が待たれる。

◎奈良には、三輪王朝という勢力があったらしいが、河内に興った新しい王朝が三輪を打倒し、天皇家がヤマトを支配することになったというのが一般的な説である。

◎戦前までは（オレの生まれた直前までは）天皇家は万世一系と考えられ、途切れることなく連綿と血を受け継いできたと言われてきたが、実際には様々な断絶があり、血なまぐさい戦いが繰り返されてきた。

◎712年奏上された古事記は、そののち永らく表舞台に登場することはなかった。日本書紀は、成立直後から官人たちに講じられ注釈がなされ、様々に引用された。古事記の最古の写本は、712年から660年も経った1371年に書写された真福寺本古事記である。

◎古事記の偽書説も出ている。「平安時代に書かれたものかな・・・」という説が江戸時代以降に多々出ている。先生は奈良時代以前にしか使われなかった音仮名表記や、万葉集の早い時期に編まれた巻きに出ていることなどから、偽書ではないという。

◎従来の評価を根底から覆したのが、本居宣長（1730～1801）であった。30年の歳月をかけ、全44巻からなる注釈書、「古事記伝」を1798年に完成させた。その結果、古事記は第一級の古典として注目されている。

◎本居宣長の功績は、厳密な本文校正と注釈作業とによって、古事記という作品を信頼すべきテキストとして提出した。しかし、宣長流の訓読と解釈に色濃く染められてしまった。宣長は日本書紀に濃厚な、唐心を排し、すべてを、ヤマト心によって解釈することで、最高の古典だと称揚した。

◎近代からの古事記研究が、近代天皇制の思想的・文献的な根拠として、政治的に利用され右傾化したのは残念。

◎安威川河原に来ています。いつものところからは河川敷に入れない。というのは、橋の工事が始まり、河川敷の遊歩道が通行止めになっている。下水処理場の門に自転車を止め、土手の外側を10分ほど走るとまず土手に上がる坂があり、河川敷に入れる坂がある。いつものように歩くようなスピードでよいしょこらしよと走っている。この一年の関心事、土手のそばの大阪府中央卸売市場の中でトラックターミナルを造っている。その工事を見るのが楽しみです。楽しみとはいえ今の段階で建物のおおよその形ができあがり、壁の一部も化粧が終わり、「あのでっぴりは何かな あそこの化粧はどうするのか」ということになってきて面白みも半減している。去年の夏ぐらいから2階建てのコンクリート建物の解体工事が始まった。毎日ちよつとずつ重機がコンクリートを壊していく、「へええ 解体とはこんなに時間がかかるの」ほぼ半年かけて更地になった。すぐにその更地の敷地のまわりを囲む塀ができ、門ができ、ガードマンが立っている。重機が入り、「基礎工事かな」と穴を掘っている。「何ができるのかな」2.3か月経った頃から大きなクレーン車が3台、コンクリートの柱を立て始めた。鉄骨の梁が柱に取り付けられ、2階の柱に移っていく。「何ができるのかな」そうこう見ているうちに4階建てのトラックターミナル建物の躯体ができあがってきた。

◎3時半、真正面に太陽がある西日が眩しいが、この季節は冬至に近づき日の入りが日々早くなって、帰るころは、自転車で乗るころは、陽が落ち夕方の黄昏時になっているだろう。眩しい夕陽を見ている限り薄暗い寒さが想像できないが、つるべ落としである。今週は晴れマークが続いているが、朝晩は寒くなってきた。「オレは寒がりです」いつも言っているが、暑い時の方が身体はしんどいね、今の寒い時期は元気だ。

◎土手の坂を登って下って河川敷に入った。まだまだ草は、緑みどりしている。これはススキや葦じゃなく、アワのような草が勢いよく緑を放ち、風にたなびいている。葛もはびこっている、ちよつと枯れかけたところもあるがまだまだ元気だね。カラスが飛び回っている、中洲の草も緑みどりしている。

◎昨日(録音して一日経っている)愛知県の豊田市美術館にリヒターを観に家族3人で行ってきた。車で3時間、交通費1.5万円、食事等1.5万円也。リヒターを語る前に豊田市はトヨタ自動車があるから市の名前も豊田になったそうだ。豊田市美術館、これにも驚いた。潤沢な資金をつぎ込んですごい空間が造ってある、この空間ならどんな現代美術も似合うぞと思える。外部の凝りように恐れ入った、でっかい自然石を敷き詰め横の壁は別注のタイルなのか、石なのか、そこにふんだんに鏡がある。鏡に映り込んだ自分を見て、「おお カッコいいおっさんが いるなあ・」なんて思うわけがないか、がはは。かってな思い込みみだけれど、建造物はまわりの景色、空間に、寄り添えるなら輝きが増してくる。汚れた環境の中に如何にデザインされた形があってもその魅力は半減する。

◎ゲルハルト・リヒター：残念ながらこの作家は知らなかった。ドイツ人では、アンゼルク・キーファーしか知らなかった。リヒターを見て、あらためてキーファーを検索して観ているが、オレはキーファーのほうが好きだ。実際は二人ともよく知らないが、この二人の美術家の仕事が、普通に知っている画家、アトリエなりスタジオがあり、そこでその作家がひねり叫び作品を生みだしているという映像からはみ出し、工場の大きな空間の中に作業服を着た行員が10人ぐらい居り、社長の指示で社長の書いた図面を見ながら、工作機械を回しボタンを押している。でっかい機械はでっかい音で、鉄や石を加工していく。できたものは美術館に収まる、というような絵が描ける。

◎リヒターやキーファーの作品画像を見ながら、オレは、「岡村君 こだわるな しょうむないことに こだわるな 思い通りに描け 捨ててもいい 失敗してもいい こだわるな」という声が聞こえる。

◎5メーター角の画面に、色がいろいろ点在した作品、10センチ角の色が無数に並んでいる、それが気に入った。絵の説明は難しい、画像を見せれば一度に簡単に解決する具体性が言語にない。これは歯がゆいところだけれど、この混沌とした言語による言語が、現代美術を語るにはもってこいなものかもしれない。

- ◎8:45 足谷口に車を止め、いざ出発。昨日の天気予報では滋賀県はお陽様マークだったが、福井、敦賀方面は雲マーク、曇り空かちびつと雨が降るかと思われてきたが快晴である、ぽろりぽろりと白い雲、ありがたい。
- ◎本日は、三宅・山田・岡村のジジイ3人の山行、ポンポン冗談がとび話は弾む。
- ◎スマホを娘からプレゼントされ昨夜慌てて、今日の目的の山の地図をダウンロードした。この2.3年通信不可のスマホを友人からもらったが、寿命のようで地図使えなくなった。今回の新品は1分もすると現在地が出た。
- ◎1時間で池原山にやって来た。この1時間がエンヤコラの登り、10回以上登った道だ。途中でジャンパーを脱ぎ、シャツ2枚に冷たい風が当たって気持ちがいい。針葉樹の部分は濃い緑で薄暗いが、広葉樹は半分枯葉を落とし、黄色、橙色、赤色が陽の光を通してほわり浮かんでいる。この山は気に入っている、稜線に出るとブナの樹が迎えてくれる、でっかい奴から、若い元気なやつ、ブナはいいですよ。
- ◎10:30 三叉路にやってきました。右へ行けば先日車を止めた横谷峠、左へ行けば若狭駒ヶ岳、高島トレイルに乗った。たらりんの尾根道、滋賀県側は針葉樹林、福井県側は広葉樹林、まっかつかとまっきき、賑やかである。風は涼しいけれど身体は熱い、思いがけず天気がいい、うれしいねえ。
- ◎また、分岐がある、右に行くと明神谷・・・そうだ以前、熊川から登った時、道の駅がある熊川から、河内川ダムの横を通して“森林公園”があった、そのあたりに明神というところあったように思う。
- ◎いよいよ尾根道、ダラリンたらりんの尾根道、「針葉樹は薄暗いが 広葉樹は美しく明るい」とおっしゃる。
- ◎12時ちょっと前に“駒ヶ越”の三叉路、右に行くと森林公園だ。いよいよ福井県が見えてきたが日本海側は霞み曇っている、海も街も見えにくい。この尾根道は両側とも、ずずい〜と下の方まで落ち込んでいる、これをよじ登るのはたいへんだ。でかいブナがで始めた、大きな顔をしてふんばっている、こんにちわ〜である。歩き始めて3時間ぐらいなのにまだ水を飲んでいない。夏は2リッターの水が足りないぐらいだった。
- ◎12:00 駒ヶ岳にやって来た。さあ飯にしようと思いを下ろして喰い始めた。いつもと同じ玄米飯に卵入りの野菜炒めだ。ハムを入れようと冷蔵庫から出したが、手にヌルヌルの感触が、「あれれ 長く冷蔵庫に置きすぎ 痛んでござる」とごみ箱に捨てた。最近肉類を喰わないね。途中“駒が池”に立ち寄った。珍しいことに人がふたりいた。池は前と同様水は少なく、中洲の辺りまで草が生えている。写真ではただの草っぱらに見える。
- ◎「太陽は素晴らしい 宇宙の偶然が素晴らしい」格言なのか、詩なのか、言葉が舞っている、陽の当たる枯れ木に腰掛け、弁当を喰ってスケッチをした。
- ◎12:30 さあ出発と歩き出して、「あれれ 曇って来たよ 予報通りに・・・」みるみるうちの空が白く、そして暗く、空気まで湿ってきた。「まさか 降ってくれるな」と気持ちのいい尾根道を進むも、この最高に素晴らしい景色を愛でるところか、「早く下りないと 降られるかも 降られたらいやだねえ」と足早に急いだ。
- ◎百里が岳に向かって進む、白い空に、あそこに太陽があるかと推察できる穴ぼこが見える、まだ完全には曇り空ではないが、雨の前の風、風が吹き出した。ここは近々また来てみたい。何度か通過したはずだが、当時はどんどん歩くだけ、体力に任せてスピードを上げて歩くだけ、山を森を尾根を身体で感じてなかったね。
- ◎ぽつりぽつりと水滴が当たったような気がする、たらりんの尾根道、「いいなあ」と思いつつも急がねば。
- ◎1:20 与助谷山にやって来た。通ったことがあるかもしれないと思ったがここは初めての下り道だった。昔降りたのはもう一つ手前の“焼尾分岐”だったかもしれない。与助谷山からの下りはオレのいつも使う地図には載っていないが、前の晩、地図の等高線をたどり尾根を木地村の方に道の線を入れた。なだらかな尾根道下りに見えるが、地図の読めない岡村君の奮闘ぶりである。
- ◎冷たい風、薄暗い空、かすかな小雨、それでもまだ雨具を出すには早すぎるが、カメラを、レコーダーを出す気にはならない。新スマホ君もがんばって現在地を教えてくれている、たらりんの坂をどんどん下った。
- ◎半分下ったぐらいのところ巨木が2本、「何の木」わからないままに素晴らしい形だ空間だ貫禄だ最高だ。
- ◎なんと降りた地点は、知り合いのA家のそばだ。「なんだ こんなところに 登山道が」と思いつつ、車のところまで30分歩いた。帰りは、東福寺の一杯飲み屋で日本酒をいただき、よれよれなって帰った。

◎もう 11 月の中旬というのかな、今日は暑い、霞んだ青空、見渡せば雲がないが出ているお陽さまもだるくワッパを作っている。暖かい、久しぶりに半そでシャツ一枚で河川敷を走っております、背中がジワリ汗ばんできます。この一週間、二週間なんだかバタバタしていた。何が忙しい、ふたつのことがある。まず、我が娘くんがオレにスマホをプレゼントしてくれた。もう一つは 12 月初旬に ZOOM 会を主宰する順番が回ってきた。ZOOM 会に参加するのは慣れてきたが、主催という今のオレにはハードルが高い。この一か月で山に延べ五日間も入り、豊田美術館も一日がかりだった、てなことでバタバタしている。

◎スマホの事：十日ぐらい前、娘くんがいろいろ設定をして渡してくれた。まわりの方々がほとんど持っておられる、あれがどうのという会話から聞き知っていることは多いが、いざ使ってみるとなかなかの難物である。3 年ほど前友人からお古を二度いただいた。二度とも通信のできないものだったが、山の地図に使いたいということでいただき、何度も山に同道した。

◎山は、ジオグラフィカを使っている。今回新品のスマホが来て、すぐに木地山計画があった。いつもと違って初めてのコースを下る計画の道は山の地図に載っていない。国土地理院地図の等高線をたどると、なだらかな尾根を下っているよう。何度も行った村のどのあたりに降りていくのか、木地峠からの下り道と関連しているのか、登山の前日にスマホに山の地図をダウンロードして印をつけた。

◎ラインの事、音楽の事、車運転のナビゲーションの事、画像の保存、パソコンとのやり取り、知りたいことやってみてみたいことがいくつもあるが、まずはひとつひとつ使いこなせるようにならないと。山の地図もやっとなサクサク動くご機嫌スマホながら、まだまだ初心者コース、早く慣れないことには。

◎ジオグラフィカというアプリ、同じアンドロイドなら 1000 円の課金で半永久的に使える。無料で使えるソフトだが、山から帰って、3 年前の課金が認証されたことも確認もできた。

◎アンドロイドとは何なのか、だれも教えてくれなかった。やっとわかったことは、世のなかのスマホは、 아이폰とアンドロイドがある。パソコンにはマックとウインドーズがある。同じように OS の違いのようで、 아이폰はマック系統のようだ、なのでパソコン同様、値が高いらしい。

◎何月何日何時からの ZOOM 会の予約をするには、検索してやり方を学び、試しに送ってみると、「いやいや違う自身のアドレスを作れば いつでもどこでもだれとでも開けるよ」と教えてくれる。人と話す、電話も ZOOM も緊張するねえ。動画のカメラを買ったときも、編集ソフトを色々物色した。イラストレーターやフォトショップは慣れて使いこなしている。同じアドビー系のソフトは高価であつかいが難しいそう。無料のものはないかと探し、ショットカットにあたった。無料ながら優れもののソフトで半年ほどかかってモノにできた。最初の 1.2 か月はちんぷんかんぷんながら、ああでもないこおでもないソフトを出してはすぐに閉じていた。スマホも ZOOM もそのうち涼しい顔で語っているやもであるが、向こうに人がいると疲れ方が違うかな。

◎陽がキラキラ顔に当たってやや熱い、背が汗ばんでくる。河原の草はまだまだみどりが緑みどりしている。こんな暖かさは久しぶりに嬉しいことだが、これから徐々に震え上がるような季節がやってくる。先日の信州の山も、麓でバスを待つ昼過ぎに、「この暑さは不快だね 寒い予報にしこたま着込んできたが 背中がジワリ汗ばむ」その時の不快な暑さが懐かしくなる山の中の雪が半日後に現実になった、翌日の山は雪山だった。帰ってアトリエで、ザックからテントとシラフを出すと半分濡れた状態、「そらあ 重いわ 冷たいわ」二晩ともシラフがべっとり湿り、よくまあこんなところで寝られたものだとあきれた。

◎魚を釣るおっさん連、川を見つめて魚の話をしている。最近 40.50 歳代の若いあんちゃんが、ルア〜で釣っている。「もうちょっときれいな川で おかずを釣ればいいのに」いらんお世話である。

三浦祐之著<口語訳：古事記>

- ◎オホサザキは、難波の高津（今はコウズと読むが当時はタカツといったらしい）の宮に坐（いま）して天の下を治めたもうた。オホサザキこと仁徳天皇は、五世紀前半に実在したと考えられる。この大君は、葛城のソツビコの娘、嫉妬深い妻イハノヒメを妻とした。難波にとって葛城は頼りになる同盟国、政治的に葛城氏をバックボーンにしなければならない立場にあった。その娘なので「大事にしなくっちゃ」かな。
- ◎戦前の教科書に載っていた話：大君は高い山に登りまわりに広がる国々を見渡し、「国の中のいずこにも煙が立っていない。これは、人々がみな貧しいからに違いない」それゆえに、今から三年の間、人々を集め働かせたり、貢物を出させることをすべて止めることにする。それから三年後に再び山に登ると、どの家からも朝餉を造る煙が立ち上がっておったので、「もういいだろう」と大殿の繕いに人々を集めたり、貢物を出させることにした。それで、大君の御世を称えて、聖の世と言っておるのじゃ。聖帝説話と呼ばれ国定教科書に載っていた。
- ◎土木工事も盛んに行われた。茨田（まむた）の堤、茨田の三宅、池、難波の水の道を海まで、墨の江の津整備。
- ◎茨田（現在は“まんだ”と呼ぶが古代は“まむた”）友人が守口駅前に住んでいる。オレは幼少時代から高校生まで、鳥飼大橋の北に住んでいた。鳥飼村や、今住んでいる茨木駅前もまだまだ田んぼの中にぽつんというところだったが、守口駅前はすでに都会だった。今も何度か自転車で守口駅前に行き友人たちと酒を飲んでいる。そこで、茨田（まんだ）堤の話も聞き、その堤の上を自転車で走っている。これらの土木工事は、中国、新羅からの渡来人、秦氏一族の技術集団によってなされたらしい。
- ◎ところでの、政には巧みな大君じゃったが、女の扱いはいまひとつでの・・・と話は続く。ここからが古事記の真骨頂、歌が続く。あらすじをざっと書いてあとあと歌を味わってみたい。古事記は口承伝承の神話中心ばかりでなく、歌が出てくるのは素晴らしい。
- ◎大君の嫁、イハノヒメは同盟関係にある大事な豪族の娘ゆえに粗略にはできないが、嫉妬深い恐い嫁ながらも、大君の好色は次々続く。
- ◎クロヒメ：なかなかいい女なので、こっそりそばに召し上げていたが太后に知られてしまう。クロヒメは太后をおそれ吉備へ帰ろうと船に乗るが、「歩いて帰れ」と太后はいかる。
- ◎クロヒメが逃避行での大君との逢瀬の歌をうたう。
- ◎太后のイハノヒメが、船でミツナガシワを採りに留守をした隙に、大君は腹違いの妹とねんごろになった。海の上、船の下働き男が、知り合いの太后のお供の女にそのことをしゃべってしまう。太后はお伴の女から顛末を聞き、船の行き先を難波から山城に向けた。大君と太后の歌の駆け引き、嫌ってはいないお互いの歌。
- ◎それでも懲りず、大君はこっそりミツナガシワ時の女：ヤタノワキイラツメと歌を交わす。
- ◎また大君は、大君の弟に、「メドリという女に 思いを伝えてくれ」と頼んだ。メドリは、「大君より 弟のあなたの妻になりたい」という展開で二人は結ばれた。それとは知らず大君はメドリに会いに行くと、メドリは歌で弟のことをうたう。
- ◎弟とメドリは、「逃げろ 殺される」とうたいながら逃げるも、最後には殺される。
- ◎戦のあとの宴の時、太后はメドリの腕飾りをつけた女を発見する。その女は、メドリを殺した兵の長の妻だった。太后は大君にその夫妻を殺させた。当時も今も、戦利品は勝者のものなのだが・・・。
- ◎そのあとに、太后や、女性関係とは別の歌が続く。

三浦祐之著<口語訳：古事記>

◎大君は、そばに置こうとした女を殿のうちに住ませることもできずにの、もし、その噂を聞こうものなら、イハノヒメは床もしなるほどに足を踏みつけしながら妬むのじゃった。

◎クロヒメ：こっそり召し上げてそばに侍らせたのじゃった。しかし、耳聡い太后がすぐにそれを知って、ひどく妬み荒れたので、その怒りを畏れたクロヒメは国元へ逃げ帰ってしもうた。

◎クロヒメ：吉備の海部の直の娘：姿形がうるわしいと聞いて、こっそり召し上げそばに侍らせたのじゃ。太后はそれを知ってひどく妬み荒れたので、クロヒメは国元へ逃げ帰った。大君はクロヒメの船がに西に向かって出ていくのを見やり、歌った。

おきへには	をぶねつらく	沖の方に	小舟が連なっている
くろざやの	まさづ子わぎも	黒い鞆飾りのごと	心惹かれるわが妹は
くにへくだらす		くにへくだらす	

◎すると、太后はこの歌を聞いてまたひどく怒っての、使いを難波の大浦に遣わし、帰ろうとするクロヒメを船から追い落として、歩いて吉備まで帰らせたのじゃった。<それを止められぬとは情けない大君：先生>

◎大君もさすがに心が痛んだのか、「淡道の島を見てみたい」と太后をだましクロヒメを追った。

おしてるや	なにはのさきよ	照りかがやく	難波の崎から
いで立ちて	わがくに見れば	海に	漕ぎだし 我が国を見ると
あはしま	おのごろしま	神の代のアハ島も	オノゴロ島も
あぢまさの	しまも見ゆ	アジマサくびろう：やし>の生えた	南の島も見えるよ
さけつしま見ゆ		遠い島々も見える	

◎大君はすぐさま、淡道の島から西に伝い行き、吉備の国に行かれたのじゃ。すると、喜んだクロヒメは、・・召しあがり物を差し上げようとしたのじゃ。それで、熱々の汁を煮るために、その山のほとりに生えている菜を摘んでおると、大君がおとめのそばに来て、歌をうとうた。

やまがたに	まけるあをなも	山の畠に	蒔いた青菜も
きびひとと	ともにしつめば	吉備の人と	ともに摘むのは
たのしくもあるか		楽しいことよ	

◎大君が難波の都に帰っていく時、クロヒメは別れの歌を贈った。

やまとへに	にし吹きあげて	倭の方へと	西風が吹いて
くもばなれ	そきおりとも	雲が遠ざかり	離れ離れになろうとも
われわすれめや		わたしは忘れはいたしません	

◎続けてクロヒメはうとうた。

やまとへに	ゆくはたがつま	倭の方へと	行くのはどこの殿方よ
こもりづの	下よはへつつ	こっそり	心を結び合いつつ
ゆくはたがつま		行くのはどこの殿方よ	

三浦祐之著<口語訳：古事記>

- ◎ヤタノワキイラツメという姫との話、太后の大いなる嫉妬と、最後に、聞くも涙の可哀そうな話・・・。
- ◎クロヒメのことがあってしばらく後のことじゃが、大きな宴をしなければというので、太后は、その宴の酒を盛るのに使うミナガシワの葉を探りに、木の国に出かけておった。その隙とばかりに、そう、寝たのじゃた。
- ◎酒を盛る：古代の酒は、おかゆのような形状でカシワの葉に盛ったのあろう。とくに祭祀における酒は、古い製法で作られるものが多い。渡来の醸造法を伝えたススコリの伝承が出てきたが、それは新しい発酵法によって造られたスミザケ：清酒であらう。
- ◎太后はそんなこととはつゆ知らず（大君がヤタノワキイラツメとねんごろに・・・）、ミツナガシワを船にあふれるほど積んで難波に向こうていたのじゃが、その時、難波の海を西に向かう者がおった。船の下働きの男が、同乗していた太后のそば仕えの女に、「大君は、太后様が不在をいいことに、ヤタノワキイラツメをおそばに置いて夜も昼もたわむれ遊んでいなさる」おしゃべりな男がいた。聞いたお伴の女は、太后の乗る船を追って聞いたことを申し上げた。太后はいつにも増して怨み怒って、ミツナガシワを海に棄てさせ、大君のいます難波の宮には戻ろうともせず、堀江、淀川、木津川、山城へと入っていった。その時の太后の歌。

◎つぎふねや やましろがはを	重なり根這う山の 山代川よ
かはのぼり わがのぼれば	川を上り わが上り行けば
かわのへに おひだてる	川のほとりに 生えている
さしぶを さしぶの木	サシブよ そのサシブの木 サシブ：しゃしゃんぼ
しが下に おひだてる	その下に 生えて立つ
葉びろ ゆつまつばき	葉の広い 美しいツバキ
しが花の てりいまし	その花のごと 照り輝かし
しが葉の ひろりいますは	その葉のごと 広がりいますは
おほきみろかも	大君様でございます

◎太后は、山城から廻り込んで奈良山の麓に到り南の広がる国を眺めて、歌う。

つぎふねや やましろがはを	重なり根這う山の 山代川よ
宮のぼり わがのぼれば	宮を過ぎて上り わが上り行くと
あをによし ならを過ぎ	木も土も美しい 奈良を過ぎて
をだて やまとを過ぎ	小さな盾なす山に囲まれた 倭も過ぎて
わが みがほしくは	わたしが 見たいと思う国は
かづらぎ たかみや	葛城の 高宮
わぎへのあたり	なつかしのわが家の辺りよ

◎こう歌うと、太后は道に戻り、山城の筒木に住む韓渡りの人、ヌリノミの家に留まったのじゃ。太后もさすがに親の家に戻るのはまずいと思うたんじゃろう。大君を慕うてもおられたからのう。大君は太后が筒木にいますのを聞いて、トリヤマという舎人を太后のもとに遣わしに歌を贈ったのじゃ。

やましろに いしけ	山城に 追いかけろ
とりやま いしけいしけ	トリヤマよ 追いかけろ 追いかけろ
あが はしづまに	わが いとしい妻よ
いしきあはむかも	追いかければ逢えようぞ

三浦祐之著<口語訳：古事記>

◎また大君は続けて、丸迹（わに）の臣（おみ）クチコを遣わし歌うたのじゃった。

みもろの	そのたかきなる	神のいます山の	その頂にある
おほいこがはら		大猪子が原よ	
おほいこが	ほらにある	そこに棲む大イノシシの	腹にある肝
きもむかふ	こころをだにか	その肝に向き合う	心だけでも
あいおもはずあらむ		互いに思い合わずに	いられようか

◎クチコが大君から伝えられた通りその心の中を・・。

つぎねふ	やましろめの	重なり根這う山の	山城の女が
こくは持ち	うちしおほね	木の鋤で	耕し作った大根
ねじろの	しろただむき	その白い根に似た	白い腕を
まかづけばこそ	知らずともいはめ	抱く前ならば	知らぬとも言えようさ

◎大君の臣クチコが雨の中額ずき、太后のお出ましを待っていた。太后のそばに仕えるクチヒメが歌った。

やましろの	つつきのみやに	山城の	筒木の宮で
ものまをす	あがせのきみは	ものを申し上げている	あが愛しの兄上よ
なみたぐましも		わたしは涙がこぼれそう	

◎それを聞いた太后が、歌のわけを尋ねると、「大君の使いとして来ているのは わたしの兄です」それを聞いて太后は哀れに思い、大君のよこした歌を聞きはしたが、心までは変わらなかった。

◎クチコとクチヒメと館の主のヌリノミの三人が話し合っ、「大君と太后を じかに逢わせるしか 手がない」ということで、クチコは大君のもとに戻り、申し上げた。

◎太后がお出かけになったわけはと言いますと、ヌリノミの家で飼っている虫で、ひとたび這う虫となり、ひとたびは殻にこもる虫となり、ひとたびは飛ぶ鳥となり、三度も姿を変えるあやしい虫がおります。太后はその虫を見ようとしてお出ましになっているだけでございます。そのほかに、大君にたてつく心などお持ちではございません。

◎こう申し上げると大君は、「われも まずは その虫を見てみたいものよ」と仰せになり、難波の大宮から川を遡り、ヌリノミの家にお入りになったのじゃが、その時に、ヌリノミはおのれの飼うておる三種（みくさ）に変わる虫を太后に差し上げていたのだ。大君は虫を見ようと、歌った。

つぎねふ	やましろめの	重なり根這う山の	山代の女が
こくは持ち	うちしおほね	木の鋤を持ち	耕し作った大根（おおね）
さわさわに	ながいへせこそ	その葉のごとざわざわと	お前が言うからこそ
うちわたす	やがはえなす	長くのびた	桑の枝のごとくに
きいりまいくれ		のび渡りきたことよ	

◎これで大君と太后は仲直りをしたようだ。

◎三たびも姿を変えるあやしい虫：絹糸を吐くカイコのこと。最近の考古学の発見によれば、日本列島で生産された弥生時代の絹織物の断片が出土している。その絹が天然物か養蚕ものかは不明らしい。蚕を飼っているヌリノミは、韓渡りの人とある。本格的に養蚕が行われるようになるのは、こうした中国朝鮮からの技術系渡来人によるものであろう。飛ぶ鳥とは、蛾のことである。

- ◎9:00JR 保津峡駅を出て、少し落合方面に行ったところに登り口があります。初めての道を登って愛宕山、月輪時をまわって帰ろうという計画、山田・三宅・岡村の3名です。
- ◎JR 保津峡駅とはどこだ、検索をして、朝、自転車で JR 茨木駅まで行き、京都駅で乗り換える計画をしていたが、阪急嵐山から JR 嵯峨嵐山まで 20 分歩くという方法があることを知り、朝、JR までの自転車の心配がなくなった、疲れた帰り、自転車を採りに 5 分も歩くのは嫌だもんね。
- ◎登山口には印も標識もない、「これだろう」まずその登山口から 10 分ぐらいは急な登り、転がり落ちたら道路に真っ逆さま、とは大げさだがエンヤコラである。そのあとはなだらかすぎる道をわっせわっせ、樹々の中、足元は褐色の落ち葉がびっしり、それでも緑が邪魔して景色は見えない。植林がされるまでは、麓の景色が見えたそう。
- ◎1 時間ほどで荒神峠にやって来た。ここは昔の道、落合と水尾を結ぶ道だが、かつては京都と亀岡にも通じていたのか、茶屋があったようで、ちょんまげやら三度笠やらが往来していたのだろうね。歩き始めてすぐにあんころもちをいただき、ここでサンドイッチを半分食べた。
- ◎登山口からの 10 分、荒神峠からの 20 分は、は～は～ぜ～ぜ～の登り、「こらあ きついな」なんて言っているうちに表参道と合流、すぐに水尾別れ、そこのあずまやでチョコレートをいただいた。温度計があり 11 度を指している。先ほどの登りでシャツの中も顔からも汗が出て小さいタオルが濡れるほどだったが、座しているとヒヤリとする。天気予報はお陽さんマークと雲マークがともに出ていた、予報通り晴れたり曇ったり、お陽さんが照ると暖かいが、曇ると手袋が欲しい、耳まで被る帽子が欲しい、今日一日そんな気候だった。
- ◎「たまには お宮さんの階段を登ってみましょうか」「50 メートルぐらいあるんですよ」エンヤコラエンヤコラ、一段一段が太ももにこたえるしんどい階段だ。でっかい石でできている、3 メーター X 30 センチ X 60 センチの石、1 トン以上はあるだろうね、灯籠も含めて石だらけ、牛か馬に乗せて運んだのか気が遠くなるね。
- ◎12:30 お宮さんの階段を降りて、月輪時に降りるところに嵐山市街が望める場所がある、いつもそこで飯を喰っている、今日もそこに腰を下ろした。Y さんが、「何度もトンビに襲われている」という。M さんも襲われたことがあるという、「へええ トンビに 食いものをさらわれる」「オレはトンビにも 蛭にもあったことがないよ」今朝は暖かい玄米ごはんは胡麻と梅干、卵とベーコンを入れた野菜炒め、旨いうまいと喰った。Y さんは近所の美味しいパン屋のパンを、M さんは野菜たっぷりの巻き寿司を喰っている。「おお やられた」何が起こったのかと前を見たが何もない、「とんびがきた パンはとられなかったが ひっかかれた」しばらくすると上空にトンビが舞っている。右へ左へ、「おお おいるねえ」とのんびりしたことを言っていると急旋回して M さんめがけて降りてきた。M さん慌てて食いものを引っ込めたので、トンビ君ふわり舞い上がっていった。「ちくしょう 残念」トンビ君の歯ぎしりが聞こえる、食いものに対する執着はすごいね、人も怖がらず後ろからそっと襲うさま、あの急降下は迫力あるね、カラスとは迫力が違う。
- ◎最初の予定では月輪時まわりで帰るつもりでしたが、「大杉谷 そこ知らない そこを通りたい」というリクエストを受けて、途中で右に曲がった。オレも、「この道は何度も 登っているが 下りは 初めてかな」急な杉の植林地帯、ジグザグにステップが切ってある。右に向いてジグザグ、左に向いてジグザク、細いジグザグをひたすら下った、「もうあきてきたね」と思いながらもまだまだ続く。時間はまだ 2 時だというのに、日暮れ前の薄暗さ、曇り空も手伝って夕方の雰囲気が出てきた。これから 12 月中旬までは陽の落ちる時間が早い、夕方の 4 時には麓に降りないとやばいシーズンに入ってきた。
- ◎ひと月前に信州の仙丈ヶ岳で雪山を体験しているが、寒さは今日の方が寒い。関西の山々も正月が近づくとぼちぼち雪が舞い始める。これはまたこれで楽しい。
- ◎歩きながら、「おおお きれいじゃないの 美しいじゃございませんか」という箇所が二つほどあった。緑と褐色の樹々の中を歩いていて、前方に幸せな光景、ほわり光が差して、紅葉が浮かび上がる。「紅葉というけれどオレは レモンイエローが 好きなんだ」「赤や オレンジや えんじ色は 今はよくない」「薄い黄色だ」

三浦祐之著<口語訳：古事記>

◎さて、続いて、聞くも涙の物語、大君が弟に、「あの女が欲しい」とくちききを頼む。女は弟に、「あんたのほうが好き」と結ばれる。大君は、「につくきふたりめ」と兵を向け殺してしまう。勝利の宴で、あの女の腕輪をつけた兵を太后が見つめ、大君がその兵の頭を殺す、というあらすじ。

◎オホサザキ（仁徳と呼ばれるのは 100 年 200 年あと）高い山に登って「民の 煮炊きの煙が上がっていないこれは生活の困っているのだろう 向こう三年 税を免除しよう」なんて言い、徳の人として教科書に載っていたそうだ。オホサザキのこの話はずまらないが、後半の、女の話は、歌があり、たくさんの地名、たくさんの人が出てきて読みごたえがある、素晴らしい。

◎また大君は、ある時、弟のハヤブサワケを仲人に立てての、腹違いの妹のメドリに思いを伝えようとしたのじゃ。ところが、メドリは使いとして来たハヤブサワケに心を寄せておったので、こう答えたのじゃ。「太后はあまりにもお強いために、大君はヤタノワキイラツメをお傍に置くこともできませんでした。それゆえに、わたくしは大君にお仕えしたいとは思いません。わたくしは、あなた様の妻になりとうございます」そして、二人はそのまま結ばれてしもうたのじゃ。そのため、ハヤブサワケは大君に返り言（ごと）ができなくなってしまう。

◎そうとは知らず、待ちかねた大君はみずからメドリのところに出かけて行って行っての、その戸口の敷居の上に立ったのじゃ。その時、メドリは、機の前に座って機織りをしておった。それで、大君はメドリに歌いかけた。

◎めどりの	女鳥よ
わがおほきみの おろすはた	わがいとしき君が おろすはた
たがたねろかも	どなたの衣になるのかな

◎すると、それに答えてメドリが歌うた。

たかゆくや はやぶさわけの	高々と飛ぶ ハヤブサワケの
みおすひがね	お召し物に

◎この歌を聞いてメドリの心を知った大君は、手も出せないままに、すごすごと宮に戻ったのじゃった。

◎この時に、夫になったハヤブサワケの許を訪れると、メドリは歌うた。このままでは二人の身が危ないと思うたのじゃろうのう。大君の求める女を横取りした使いはただではすまぬからのう。

ひばりは あめにかける	ヒバリは 大空を翔り飛ぶ（かけりとぶ）
たかゆくや はやぶさわけ	高々と飛ぶ ハヤブサよ
さざき取らさね	ミソサザイなんぞひとひねり

◎人伝てにこの歌を聞いた大君はの、すぐさま軍（いくさ）を整えてハヤブサワケを殺そうとしたのじゃ。すると、それを知ったハヤブサワケとメドリは、手に手を取っての、倉橋山に登って逃げたのじゃった。その時、ハヤブサワケが歌うた。

はしたての くらはし山を	立てたはしごの 倉橋山が
さがしみと	あまりにけわしいものだから
いわかきかねて わが手とらすも	岩をつかめず わが手つかむよ

三浦祐之著<口語訳：古事記>

◎続けて。

はしたての ぐらはし山は 立てたはしごの 倉橋山は
 さがしけど けわしいことはけわしいが
 いもとのぼれば さがしくもあらず お前と登れば けわしくもなし

◎そうして、ふたりはその山を越え逃げ、宇陀の曾爾まで行ったのじゃが、そこで大君の軍が追いついての、ふたりを殺してしもうたのじゃった。

◎この伝えには、もう一つの哀れな話がついておっての、その戦（いくさ）を率いておったのは、山部の連のオホタテという男での、そやつは、殺したメドリが手に巻いておった美しい腕輪を剥ぎとり、おのれの妻に与えたのじゃ。そのことがわかったのはこういうわけじゃった。

◎この戦の後に、大君は、戦で功のあった者たちを集めて宴を催したのじゃが、そういう時には、兵士（いくさびと）だけではのうて、その氏たちも招かれることになっておっての、その妻たちも招かれておった。そのなかに、オホタテの妻も交じっておっての、メドリの美しい腕輪を手首に巻いて参ったのじゃ。そのことがわかったのはこういうことじゃ。

◎この戦いの後に、大君は、戦で功のあった者たちを集めて宴を催したのじゃが、そういう時には、兵士だけでのうて、その氏の者たちも招かれておっての、その妻たちもみな招かれておった。その中にオホタテの妻も交じっておっての、メドリの美しい腕輪を手首に巻いて参ったのじゃ。

その折、太后のイハノヒメは水から酒を盛る柏の葉をもち、それぞれの女たちをいたわりながら、その柏の葉を手渡していった。そして太后はオホタテの妻の前まで来て、その腕に巻かれた腕輪をひと目見るなり、酒を盛る柏を与えようとはせずに引き下がってしもうた。太后も女よのう、その腕輪が前に逢うた時にメドリが巻いておったものであることを、一目で見抜いてしもうたのじゃ。

そして、その夫のオホタテを召しだすと、

「あの二人の者たちは、大君に背いたから殺せと仰せになったのだ。これは何もやましいことではない。ところがそなたは、臣（おみ）の身で、おのれのお仕えする御子が手に巻いておられた美しい腕輪を、まだその肌も温かいというのに剥ぎ取り持ち帰って、おのれの妻に与えるとは」というて、すぐさま殺す刑（つみ）を与えなさったのじゃった。

◎兵士（いくさびと）どもが、殺した仇（あた）が身につけていたものを奪い取るのは当たり前のことよのう。今もそうじゃろう。ところが、太后はそれが許せなかったのじゃ。大君の心に背いてまで好きな男に添おうとしたメドリの心をお持ちの方での、それゆえ妬みの心も強いんじゃよ。

◎美しい腕輪：原文では玉鈕（たまくしろ）とある：鈕とは：玉石やガラス玉に穴を開け紐を通して手首に巻くブレスレットのこと。釧とも表記する。女性の装身具だが、ただ身を飾るだけではなく呪術的な意味を持っていたと考えられる。また、シャーマンなどはたくさんのクシロを巻いていたらしく、出土する人骨などとともに様々なクシロが出土している。

三浦祐之著<口語訳：古事記>

◎さて、ここいらで、太后と関わりない伝えも語っておこうかの。最後のこの部分、棄てるには惜しい・・・。

◎この項の最後に：オホサザキの大君の御年は、八十あまり三歳（みとせ）での、丁卯（ひのとう 427 年）八月（はつき）の十（とうか）あまり五日に亡くなったと伝えておるの。御墓は、毛受（もず）の耳原に在るのじゃ。伝承なので、死亡の年や墓のことは、真実だとは疑わしいのでは・・・。

◎ある時、大君は宴を催そうとなされての、日女島にお出かけになったのじゃが、その時、その島に雁が卵を生んでおった。それを見た大君は、お伴のタケウチノスクネを召しての、歌でもって雁が卵を生んだことについてお尋ねになったのじゃ。その歌というのはこういう歌じゃ。

◎雁：ガン、カモ類は日本列島には秋に渡って来て越冬するが、産卵はしない。ふだん生じない出来事が起こり、吉凶の前兆と考える。ここでは雁が卵を生んだことを、めでたい印と見ている。

たまきはる うちのあそ	いのち極まる 内の臣よ
なこそは 世のながひと	そなたこそは 長く生きた人
そらみつ やまとの国に	空までも山のそびえる 倭の国で
かりこむと聞くや	雁が卵を生むと聞いているか

◎タケウチノスクネ：歌をもって語り返した。

たかひかる 日のみ子	高く輝く 日の御子よ
うべしこそ とひたまへ	よくこそ お尋ねくだされた
まこそに とひたまへ	まことに よくお尋ねくだされた
あれこそは 世のながひと	わたくしこそは この世を長く生きた者
そらみつ やまとの国に	空まで山のそびえる 倭の国で
かりこむと いまだ聞かず	雁が卵を生むなどと 聞いたこともございません

◎大君から琴を賜り、琴を弾きながら歌った。

ながみこや つひにしらむと	あなたさまの御子たちが 世の果てまでも治めると
かりはこむらし	雁は卵を生んだのでございましょう

◎また、大君の御世のことじゃが、兎寸河（とのか）の西に、大きな木があった。その木の影は、朝日が当たると淡路の島まで届き、夕日が当たれば高安の山を越えるほどじゃった。そこで、その木を伐って船を作ったところが、とても速く走る船ができたのじゃ。それに名をつけての、枯野（からの）というておった。その船で朝夕淡路島のおいしい清水を汲んで、難波の大君の飲み水として運んでおった。船が朽ちてきたので、塩を焼く燃料に使った。焼け残りて琴を作ると、その音色が素晴らしいので、大君はその琴を称えて、歌った。

からのを しほに焼き	枯野を 塩に焼いて
しがあまり ことにつくり	その残り木を 琴に作り
かきひくや	かき鳴らしてみたところ
ゆらのとの となかのいくりに	由良の渡りの その水の中の岩に
ふれ立つ なつの木	生い茂り揺れ立つ 海の藻のごと
さやさや	音はさやさや